

【大会報告】

第 41 回日本基礎老化学会大会を振り返って

樋上 賀一

東京理科大学

薬学部生命創薬科学科 教授

総合研究院トランスレーショナルリサーチセンター長

2018年5月31日から6月2日にかけて、東京理科大学葛飾キャンパスにて、『基礎老化研究からトランスレーショナルリサーチへ』という主題で、第41回日本基礎老化学会を日韓合同シンポジウムと、さらに平成26年度私立大学戦略的研究基盤形成支援事業により5年間の時限で設立されたトランスレーショナルリサーチ (TR) センターのシンポジウムとの合同で開催させていただきました。この合同会をお認めいただき、また開催にご協力いただき、さらに大会に参加いただいた全ての皆様に、深く感謝いたします。

一般演題のうち口頭発表は56演題(うち若手枠発表22題)、ポスター発表は21演題とそれなりの演題数が集まり、また実質参加者数は212名(一般会員87名、学生会員17名、非会員108名)とかなりの数の方々にご参加いただけたことを考えると、多少のトラブルはあったものの一応成功裡に終えることができたのではないかと安堵しているところです。

今大会では、1つの会場で広々とまた一般口演においても1演題15分と余裕を持ってご発表いただき議論できるようなプログラムになるように配慮いたしました。そのため、都内とはいいながら都心からやや離れた交通の便の悪い葛飾区での開催になってしまいました。しかしながら、3題の招待講演や8題の日韓合同シンポジウムを含め3日間の長丁場ではありましたが、広々と席を使ってあまり疲れずに発表や議論に集中いただけたのではないかと考えております。一方、他学会のスケジュールを勘案したばかりに、就職活動の解禁日に学会開催日がかぶってしまったため、折角大学内で開催したわりには、学生の参加、特に修士課程2年生など主力学年の学



生の参加および発表が少なかったのが、残念でした。

最近の分子生物学や分子遺伝学の進歩、さらにデータサイエンスの進歩は目を見張るものがあります。3日間のプログラムを通して、分子生物学や分子遺伝学の進歩に裏打ちされた、また海外経験のある若い先生方のレベルの高い発表が着実に増加している印象を持ちました。老化現象を解明するには、時間軸に沿ってその多様性が大きくなる、また多臓器間の相互作用自体が変化するという特徴を、個体レベルで包括的に理解する必要があります。そのような特徴から、今後の基礎老化研究では、『がん』などの他分野の研究よりも、さらにデータサイエンスなどを駆使したより学際的な研究が必要になるものと考えます。理工系総合大学である本学においてTRセンターシンポジウムとの合同で開催するという事で、専門性のみならず、このような学際的な共同研究の芽ができればとの期待もありました。しかしながら、学内における広報活動が思うに任せず、この件に関しては十分な成果を得ることができなかったのも残念でした。今後、



本学会が今にも増して、異分野の研究者も集うことができる、より学際的な研究交流の場となり、益々発展することを期待しております。

最後になりましたが、特にプログラム委員を快くお引き受けいただいた芝浦工業大学新海正先生、福井浩二先生、東邦大学高橋良哉先生、千葉大学清水孝彦先生、演題が十分に集まらない時期に研究所内にお声がけくださいました国立長寿医療研究センター丸山光生先生、また学会開催にあたり多くのご助言を賜りました東京都健康長寿医療センター研究所遠藤昌吾先生、長崎大学森望先生に深謝いたします。

